

昨年の大地震、大津波、それに続く原発事故のダメージはまだまだ癒えることはありませんが、これからもあり得る災害や困難な事態に少しでも有効な対処ができるように、心の備えをしていきたいと思います。

■■■■ 今号の記事 ■■■■

- ・第36回総会案内
- ・公開講演会案内
- ・卒業生エッセイ
- ・教養講座要旨
- ・教養講座予告
- ・書籍の紹介

2012年度・総会・公開講演会・案内

総会

第36回総会を下記のとおり開催します。会員の皆様は、ご出席下さいますようお願い申し上げます。なお、ご欠席の場合は委任状をご提出願います。

日時：2012年6月23日(土) 12:30～13:30
場所：早稲田大学人間総合研究センター分室
(新宿区戸塚町1-101 高田牧舎ビル2階)

公開講演会

早稲田大学心理学専修OBの林春男・京都大学防災研究所 巨大災害研究センター教授をお招きし、「災害時の人間行動」と題してお話しをして頂きます。

日時・・・2012年6月23日(土)15時～17時、
会場・・・小野記念講堂(早大本部・正門前)
東京メトロ東西線・早稲田駅から徒歩5分。
山手線・高田馬場駅より都バス早大正門。

懇親会

日時・・・2012年6月23日(土)17時半～19時半、
会場・・・イル・デ・パン(小野講堂より徒歩2分)
会費・・・4200円(事前申込)、4500円(当日申込)

「災害時の人間行動」

～災害に負けないしなやかな社会の創造～

21世紀前半の我が国は地震の活動期にあたり、南海トラフの巨大地震や首都直下地震など広域巨大災害の発生が予測されています。「国難」ともいふべき事態をどう乗り切るかは非常に重要な課題です。



林春男氏

地震そのものは自然科学の対象ですが、それによって引き起こされる災害は社会科学の対象です。

私自身も1983年の日本海中部地震以来、30年近く災害時の人間行動について研究を続けてきました。そこから学んだことをもとに、災害に対してどのように備えるか、災害発生時にどのように応急対応するのか、その後長く続く復旧・復興期にどのように活動するか、という時間的流れに即して、人間の視点から防災についてお話しします。

林春男氏略歴

1979年早大大学院博士課程終了後、フルブライト留学生としてUCLAに留学。83年同校より博士号(Ph.D)取得。弘前大、広島大などを経て、1996年京都大学防災研究所・巨大災害研究センター教授。

主な著書

- ・「しなやかな社会への試練－東日本大震災を乗り越える－」(日経BPコンサルティング)
- ・「災害のあと始末 東日本大震災緊急改訂版」(エクスナレッジ)
- ・「組織の危機管理入門」(丸善)
- ・「いのちを守る地震防災学」(岩波書店)など

卒業生エッセイ

『志賀高原の四季』

佐藤 秀樹

1979年一文心理

唐突に、ただ唐突にK先生から最近の様子について何か書け！との依頼がありキーをたたいています。K先生のお言葉は天命です。即ち、学生時代のこと遅れて提出したレポートを受け取っていただいたのも、卒論を書き上げるために合宿（於：アバコ）を開いていただいたのも、さらには二つ返事でお仲人役までお引き受けいただいたのもK先生です。



佐藤 秀樹氏

私は全くの劣等生でした。それ故、現在は学生時代の専攻とはかけ離れた、ホテル業に就いて日々糊口を凌いでいます。それでも何を勘違いするのか、周囲からは早稲田で心理学を専攻したからには人の心がわかる？でしょう、とよく言われます。何を馬鹿なことをと思いますが、世間様の心理学に対する誤解と期待を感じる瞬間です。



春

現在勤務していますのは長野県にあります志賀高原スキー場のスカイランドホテルという宿泊施設です。スキーブームも去り、売り上げがバブル期の半分以下という超低空飛行が続いています。いつ墜落してもおかしくない状態です。逆に言うと、売り上げが半分になっても経営が成り立っているのですからバブル期にどれだけ溜め込んだのかとよく突っ込まれます。けしてそんなことは無く、金は天下の回りものといいますが、回って行ってしまったものは帰ってこないのだと今更ながら気付いています。沢山入るときには同じく沢山出て行き、留まるものは少ないようです。



夏

仕事はといえばホテル業全般を受け持ちますが、はっきりオンとオフが一年の中で入れ替わります。春と秋は開店休業状態が続きその期間は東京で飲み歩きの日々、逆に夏と冬は1日の休みも無くお客様に振り回されています。1年間の中では志賀高原での生活が長くなります。家族は東京に住まいし、私の住所登録も東京ですので単身赴任になると思います。亭主元気で留守がいい、、、の8ヶ月版です。



秋

ホテル業の喜びは種々ありますが、一口で表すなら多くの人に会える、これに尽きると思います。この仕事に就いていなければ言葉を交わすことも無かった多く皆様が、また今年も来ましたよ、と声をかけてくださいます。そのときの嬉しさは格別です。年間ご宿泊者の8割がご常連さんあるいはご紹介の方々です。そんな皆様のお言葉に励まされて超低空飛行に耐えている毎日です。



冬

『精神保健福祉専修助手の仕事に就いて』

桜美林大学健康福祉学群
精神保健福祉専修・助手 宮村 りさ子
(第二文学部社会人間系専修)



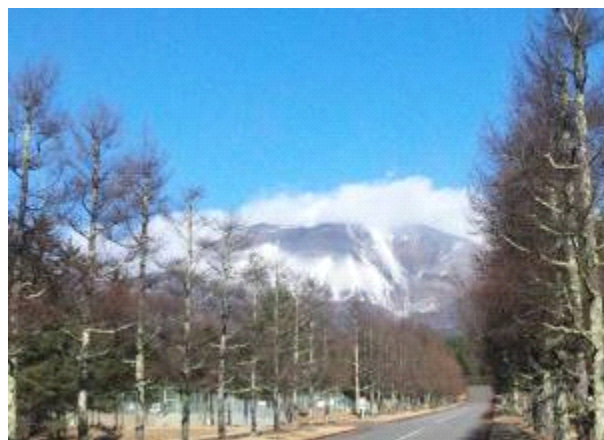
私は、2011年4月に桜美林大学健康福祉学群精神保健福祉専修の助手として着任しました。精神保健福祉専修では、精神障害者の福祉を学び、大部分の学生が精神保健福祉士の国家試験を受験します。精神保健福祉士とは、統合失調症やうつ病などの精神障害を持つ人の、福祉サービスや制度の活用、社会生活を送るためのスキルの習得、就労などに向けた支援を主な仕事とする福祉の専門職です。主に行政機関や病院、精神障害者授産施設などで働いています。

私の主な業務は、学生の学業面や心理面のサポート、実習先との連絡、見学実習の引率、実習巡回指導、授業の手伝い、毎年大学で企画される精神保健福祉士及び社会福祉士の国家試験対策講座の講師などです。国家試験受験予定の学生に対しては、国家試験の問題と対策について一緒に取り組みながら、心理面でもサポートをします。

国家資格をめざす学生は、行政機関・病院・精神障害者授産施設などで合計4週間余り実習をします。実習では現場指導者から指導を受け、クライアントと関わるため、不安、緊張、落ち込みなどのネガティブな気持ちが伴うこともあります。そのような気持ちが強いあまりに、自信や動機づけが低下する学生もいます。そんなとき、学生が抱える気持ち、問題や状況を聴き、助言をします。就職活動や進路相談についても同様です。また、学生が安心して大学生活を過ごすことができるようにサポートすることも仕事の1つであるため、友人関係やアルバイトといった学業以外についても相談に乗ります。

私は早稲田大学では第二文学部社会人間系専修に在籍しました。この専修の魅力は、心理学だけでなく隣接領域の単位も修得できることでした。カウンセラーになることを志して入学しましたが、心理学だけでなく社会福祉の科目も履修しました。クリニックにてカウンセラーを務めた時、福祉サービスや制度を活用する必要のあるクライアントを多く担当したため、社会福祉の知識が役立ちました。

また、早稲田大学在学中の4年間、追分にあったセミナーハウスにて3泊4日の合宿に参加しました。そこでは、研究発表と、卒業生や大学院生、先生方による質疑応答があり、活発な議論が交わされ、夜の宴会でも日中に行われた研究発表についての議論が続きました。他にも、第一文学部心理学専修の学部生、文学研究科心理学専攻や人間科学研究科の大学院生、先生方と共に研究や将来について話す機会を得ることができました。



追分セミナーハウス

そのようにして早稲田大学在学中に多くの方々と接し、指導や影響を受けることができましたので、「カウンセラーになる」という入学時の目標が「臨床、研究、教育のできる専門職」になることへと変わりました。さらに、数年前に精神保健福祉士と社会福祉士の国家資格を取得し、現職に就いた今でも、その目標に少しでも近づけるように努力しています。

第12回教養講座:2011年10月29日

『仕事との出会い方とその続け方』
～就労支援カウンセリング事例と
就活川柳・一人百句から考える～

小林 源

(産業カウンセラー、
LEC東京リーガルマインド大学教授)
1962年一文・心理

1. 話の前提

やや奇妙な表現とサブタイトルかも知れないが、体系的、論理的、いわんやアカデミズムとはほど遠い筆者の仕事からは、こんなタイトルしか選べなかった。しかし通算すれば8年余りに及び、かつ今なお継続中の東京都内2区で行なう、就労支援のためのカウンセリング事例は、1000人を超え、生々しくも身に迫るものばかりだ。研究室にいては想像もつかない、現実を知ることができ、事後に行なう無記名のアンケートの集積からは、仕事を求め、これを続けることへの尽きない悩みが、正確に読みとれる。この貴重な経験からしか得られない話を紹介しようと思ったのである。ちなみに来談者は、当該区に在住か、在職か、在学する人たちに限られ、1回50分。予約制で、無料である。いわば、区民に対する就活支援事業である。

2. サブタイトルについて

前述のように、現実を映す山のような事例と、その傾向を示すアンケートとその順位は、極めて確かなものとして手元にある。しかしこの事態を一部始終伝えとなると、なまじの時間と労力では果たせない。加えて、適職とは、適性とは、等の各論から始めたら紙数は尽きまい。そこで窮余の果てに気づいたのが、アンケートの悩み上位10項目への対応を川柳にして表現することだった。項目ごとに17文字に要約できるし、多少面白おかしく表現できれば聞き易く、納得もして貰えようかと思った。今回はアンケートを上位10項目に絞ったが、川柳そのものは100句ある。一人で100句つくったから「一人百句」となる。



小林 源氏

3. 事例と川柳の関係

一例を挙げよう。一定期間ごとにアンケートを集計して、常に圧倒的トップになるのが、自分の適職が分らない、の悩みである。この常勝トップ項目となる回答には、世の中には自分にとっての適職がある筈で、それをどう探していいか分らない、との考えが透けて見える。結論を急ぐと、要はこれが間違っている、ということに気づいて貰う必要があることである。換言すれば、仮に適職というものがあるとして、皆が皆これを追い求めたら人がイヤがる仕事、危険で汚くて環境が劣悪だが社会に不可欠な仕事は、一体誰がやるのかという根源的な問題に出くわすことにもなる。繰り返すが、適職はあると思っ
てはいけないのである。にも拘らず、適職を求めて大学卒業後5年、10年はたまた30年も、未だ定職を決められずに相談に来る人が珍しくない。こうした事例、類似の相談に出会うと次ぎのような川柳を発句したくなるのである。即ち“適職に こだわりすぎて まだ無職”。これはビジネスに関わる川柳の投稿欄のある新聞に掲載された。このことの意味は、選者の認識と一致し、新聞紙上に掲載しても共感を得られよう、との総合的判断が下された結果だと思う。要は、適職にこだわっていつまでも無職でいたら、そのことの方が余程問題だという警句であり、失礼ながら皮肉でもある。つまり、こういう形で適職とは何かを考える一石を投じたかったわけである。そもそも適職とは何かと大上段から振りかざすより、遥かに親しみをもって、容易に適職って何だろうと考えていただけると思考した訳である。ことほどさように、就職に関わる悩み上位10項目に、川柳で触れてみたのである。

4. 仕事の悩み上位10項目と対応する川柳 (上段, 悩みの質問。上位から。下段, 川柳)

- (1) 適職と適性がわからない
「適職に こだわりすぎて まだ無職」
「適性も 生きているから 変化する」
- (2) 仕事の探し方, 選び方が分らない。
「仕事とは 探すのでなく 出会うもの」
- (3) 応募書類の書き方を知りたい。
「ラブレター 書いて上達 応募書類」
- (4) これまでの経験を生かせる仕事を希望
「ヒカリモノ 示して語れ 経験は」
- (5) 未経験の仕事にチャレンジしたい
「未知の道 人に求める 重装備」
- (6) 企業の求める人材について知りたい
「人材像 企業の数と 同じだけ」
- (7) 面接に自信がない
「面接と 書類づくりは 同じこと」
- (8) こだわりたい条件がある
「こだわりに 見合う条件 忘れるな」
- (9) 人間関係に自信がない
「人づき合い 上手くいく頃 もう定年」
- (10) フリーターを卒業したい
「目標は 努力見合いで 遂げられる」

なおアンケートは、ある半年間144名に対し実施したものであり、その集計である。



戸山キャンパス・第二研究棟・第5会議室

【教養講座について】

多彩なテーマで開催しています。会員の交流と情報発信を目的とし、自由な意見交換を行っています。事前申込み不要ですのでお気軽にご参加下さい。

10月27日開催予定の教養講座

笑い与健康

— 笑いの社会健康的・進化的意義と日常の実践

目白大学人間学部講師 野澤孝司氏
笑いヨガ・ティーチャー 高橋カレン氏

人の日常生活で最も一般的にみられる行動の一つに「笑い」があります。古くから「笑いは百薬の長」とか「笑いに勝る良薬なし」などとも言われ、笑う行動と心や体の健康状態には、何らかの健康-効能的な関係があることが示唆されてきました。



野澤孝司氏

最近では、笑いは体に対する実際的な作用として、免疫系や内分泌系などに対する医学的な効果も確認されており、精神的にもストレスに対する対処法の1つにもなると考えられています。日常および社会的にも、笑いをより積極的に生活に取り入れることは、単に予防医学的な効果を持つだけでなく、より積極的、社交的に生きるための精神的な糧(かて)や生きがいとしても重要な健康的態度の1つとなってきたと思います。

この講座では、笑いのもつそうした健康に対するポジティブな効果、笑いの生理心理学的機構などの側面について、横隔膜を中心とした身体的「腹」の進化の視点から興味深く解説したいと思います。



高橋カレン氏

研修の後半には笑い行動の実践的体験として、最近日本でも活動が広がっている「笑いヨガ(ラフターヨガ)」について、解説と実演・体験参加セッションを笑いヨガティーチャーの高橋カレンさんをお願いする予定です。

(会場は未定。決まり次第、ホームページなどに記載します。)

書籍の紹介

『人を助けるすんごい仕組み』

ボランティア経験のない僕が、日本最大級の
支援組織をどうつくったのか

西條剛央・早稲田大学大学院(MBA)専任講師
「ふんばろう東日本支援プロジェクト」代表

ダイヤモンド社 2012年2月 第1刷 定価1500円

著者は哲学と心理学を専門とし、早稲田大学大学院MBAコース専任講師をつとめている。池田清彦氏の「構造主義科学論」に示唆を受け、みずから「構造構成主義」という哲学を生み出し、その理論を実践し、被災地に対する数々のプロジェクトを立ち上げ、実践している。

その「哲学」は極めてシンプルで、方法の有効性は①状況と②目的に応じて決まる。そのため方法が無ければ、その場で作る。ホームページとツイッターのそれぞれの利点を活かし、必要な物資を必要な所に必要な量だけ送る。

アマゾンの「欲しいもののリスト」を活用して2万4千個以上の物資を送る。大阪市をはじめ、各地に滞留していた支援物資をスピーディに必要としている被災地に送る。陸前高田市では「重機免許取得プロジェクト」で121名が免許を取得した。「家電プロジェクト」では公的支援の受けられない個人宅など2万5千世帯に家電を送った。

その原理は組織の運営にも援用される。目的とビジョンだけは共有し、状況に応じて柔軟に対応し、シンプルを旨とする。組織が大きくなり、活動が長びき、メンバーに疲れが見え始めると、フェイスブックで呼びかける。

事後に、筆者はプロジェクトを立ち上げた南三陸町が父祖の地であることを母親からのメールで知る。叔父さんの安否を心配して仙台に行き、そこから南三陸町にたまたま向かったと思っていたが、そこはひいおじいさんの出身地だった。偶然か必然か。ここでも彼は自身の哲学から問いを立てる。そして、自分は「呼ばれた」のではないかと考える。

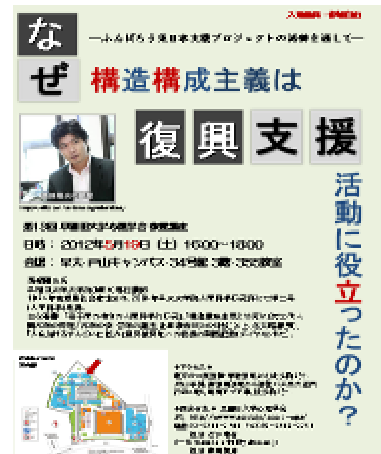
(74年 一文心理 中村誠)

西條剛央先生の教養講座が開かれる

5月19日(土)16時～18時、早大戸山キャンパス34号館355教室にて西條剛央先生の教養講座、「なぜ構造構成主義は復興支援活動に役立ったのかーふんばろう東日本支援プロジェクトの活動を通してー」が開かれました。

西條先生が、かねてから人間科学の稔りある発展のために始められた「構造構成主義」の考え方が、昨年3月11日、東北地方を襲った未曾有の大災害に対する支援活動のために、どのように役に立ったのかをお話して下さいました。

告知期間が短かったにも関わらず、たくさんの方が見え、熱心にお話しに耳を傾け、活発な質問をして下さいました。



発行元： 早稲田大学心理学会
〒162-8644 新宿区戸山1-24-1
早稲田大学文学部心理学教室内
電話 03-5286-3743 FAX 5286-3759

担当：石井康智
メール：waseda_shinri@yahoo.co.jp
担当：朝岡美好

書類発送元：
一般社団法人学会支援機構
〒112-0012 文京区大塚5-3-13
小石川アーバン4F
電話 03-5981-6011 FAX 5981-6012

早稲田大学心理学会ホームページ：
<http://www.waseda.jp/assoc-wpa/>
※情報の変更、更新、追加などは適宜、早心HPにてご確認ください。